

# 届け 世界の果てまでも

令和3年 1月29日

No. 61

文責 校長・飯久保一男

## 食べ物への感謝 ②

1月24日から1月30日は、全国学校給食週間です

前号に続き、食べ物にまつわる話です。五十代半ばの男性が、貧しかった自身の小学生時代の苦い思い出を新聞に投書していました。その一部です。

食べ盛りの兄弟が4人もいたので、母にとっては、毎日の食事を確保するのがやっとだったと思う。そんなある日、母が何を思ったのか、上等なデコレーションケーキを買ってきてくれた。甘い物に飢えていた私たちは、そのケーキを見て、誰がどこを食べるかを巡り大げんかを始めてしまった。すると、私たちのけんかにあきれた母が、いきなりケーキのデコレーション部分をグシャグシャにして、  
「さあ、どこでも好きなところを食べなさい！」  
と怒鳴った。

すかさず脱線します…。同じく五十代の者として、子どものころ、ケーキを食べる機会なんて、思い出そうとしても思い出せないくらい、ほとんどなかったように思います。バナナが家にあることで興奮したこと、風邪をひいて熱を出したとき、母がリンゴをすりおろしてジュースにしてくれたことの思い出の方が残っています。私が小学校4年生くらいだったと思いますが、日本とアメリカとの貿易が自由化し、オレンジやグレープフルーツなどの果物がたくさん輸入されるようになり、私の口にも届きました。グレープフルーツは、輪切りにして、グラニュー糖をかけ、先がギザギザのスプーンですくって食べました。他のミカンなどとは食べ方が違い、不思議な気がしたことを妙に覚えています。メロンを初めて食べたのはいつだったか思い出せません…。



…私の小学生のときの思い出は、本校ホームページ【学校長より】→【校長のつぶやき その1～4】に掲載してあります。



さらに脱線しますが…。私には、ケーキと「おしゃれなお菓子(うまく表現できません…左のようなお菓子のことで)」のさかい目がわかりません。カステラのようなスポンジの上に生クリームが乗ってればケーキだと思いますが、今ではそうでないケーキもありますし…。ケーキ屋さんで売っているものはすべてケーキと言っていいのでしょうか。最近「スイーツ」なんて言うこともありますし…。英語を学んだときに「cake=お菓子」と訳すのに違和感を覚えたのは私だけでしょうか…？

このお母さんの気持ちはよくわかる気がします。何かの記念日というわけではなかったようですが、普段はなかなか食べさせてやれないケーキを子どもたちに食べさせようと、大変な苦勞をして買ってきたのではないかと思います。臨時にお金が入ったのかもしれませんが。節約を続けて、ようやくケーキを買えるお金ができたのかもしれませんが。しかし、そうやって買ってきたケーキが、兄弟げんかの元になってしまい、とても悲しい気持ちになったのでしょう。子どもたちが、喜ぶ姿、おいしそうにケーキを食べる姿を予想して買ってきたはずですが、正反対の出来事になってしまったことに悲しくなったのだと思います。

ケーキをグシャグシャにしたことの効果はてき面でした。お母さんの思いは、子どもたちに伝わったようです。男性は、そのあとの文章で次のように書いています。

めったに口にすることができなかったケーキが、妙に味気ない食べ物に感じられた。

飽食の時代といわれる現在です。食べ物に対して「感謝」を忘れがちになります。給食の食べ残しが大量にあってびっくりすることもあります。



- 人々がどんな思いでその食べ物をつくっているのか
- どれだけ多くの人々や自然が関わっているのか
- 給食を簡単に残していいのか
- 親はどういう思いで食事をつくっているのか

これらのことを、機会あるごとに子どもたちに考えさせてほしいと思います。日本だけが当たり前になっていることが、たくさんあるように思えます。また、我が家だけが当たり前ということもないでしょうか。

ケーキをグシャグシャにすることは、勧められることではありませんし、感心することでもありません。しかし、そこまでしてでも、このお母さんは「食べ物への感謝」と「自分だけのことを考えるな」と子どもたちに伝えたかったのです。

### 父の弁当

妻がドアに右手をはさんでしまい、つかむことも握ることもできないほど指先を腫らしてしまった。そこで、父親の私が息子の幼稚園の弁当をつくる羽目になった。

始めは、コンビニがあるじゃないかと思っていたが、息子が「えっ、それじゃ、パパがつくるの～」とあまりに不満そうな声をあげるので、少々、意地にもなったのである。というか、実はこんな機会を待っていたのだ。

私もどういういきさつか、父に弁当をつくってもらったことがたった一度だけある。

小学校の5年生の遠足のときだ。

あのときはびっくりした。

小玉スイカぐらいの大きさのおにぎり。

海苔で真っ黒、真ん丸の様は、まるで爆弾のようだった。

友だちにも珍しがられ、うらやましがられ、大ウケだった。

これを私がつくってやろうというのだ。

父直伝の爆弾おにぎり。

その夜、妻から、息子が大喜びで帰ってきたと聞かされた。

幼稚園でもだいぶ評判になったそうだ。

ところで、妻の指はまだ芳しくない。

夕飯は冷凍食品で何とか済ませたけれど、洗い物はお願いと言われる。

食器を洗う私の背後から、妻がゴメンナサイと言っているが、私はニヤニヤして聞いていない。

明日は、どんなお弁当にしようか考えているのだ。

